2009年度 修了

重複障害の入院患者の行動拡大に向けた取り組み
－ 金銭管理プログラムを利用した実践 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害･行動分析クラスター
加賀野　周作

精神科病院に入院する重複障害者は精神疾患の治療を目的としているため、精神症状が軽快した時点では、施設や自宅へ退院をしなくてはならない。しかし、現状では重複障害の特性上、退院支援が困難な状況にある。それ故、精神科病院に入院している段階で、適切な支援が提供され、「治療・教授」、「援助」、「援護」の連環のもとでIADLを高めていくことが重複障害者の社会復帰には求められる。精神科病院で入院治療を受ける重複障害（者）に対しては、急性期から寛解期までの治療過程を通して継続した支援を行う必要がある。しかし、重複障害（者）の支援に関しては病理モデルに限界があることは否めない。これからの精神医療には、精神疾患と生活障害を包括的に捉えなおし、医学、心理学、社会福祉学に併せて、行動分析学の立場からも支援の可能性を探ることが求められている。このことから、精神科病院に入院する重複障害者の身体管理、金銭管理、行動範囲の拡大に焦点をあてた金銭管理プログラムを実践することによって、入院治療において病理モデルに依存してきた精神医療の在り方を再考し、重複障害（者）に対する新たな支援プロセスを検討する。

金銭管理プログラムでは、小遣いの金額設定による身体管理が主な目的であるが、それに付随した金銭管理、買い物、乗り物での移動といった日常生活に関連があるIADLの拡大にも視点をおいた。金銭管理プログラムの介入後は、長期目標として施設入所、短期目標として減量、金銭管理、買い物、公共交通機関の利用などを提示し、明確な目標設定と、それを支援する環境設定を行った。その結果、金銭管理プログラムを通して、減量、貯蓄行動への派生、飲食物購入の自制、公共交通機関を利用した外出及び外出範囲の拡大をみることができた。この結果から、目的とした減量はもとより、IADLが向上・拡大したことが、このプログラムを実践したことの意義といえる。そして、重複障害者が“保護される”存在として、精神科病院を中心に日常生活を送っていた（送らざるをえなかった）環境から、金銭管理プログラムによって日常生活能力や生活圏が向上・拡大したことは、重複障害者に対する支援プロセスを考察するなかで有効なデータとなった。また、重複障害者に対して実践した金銭管理プログラムはこれからの障害者支援を検討するうえで、基礎的な役割を示したものと考える。